古典落語に学ぶ

落語家
立川談四楼

第四十八回　筍（たけのこ）

ある隣り合わせに住む武家屋敷での話です。

「これ、今日のオカズは何じゃ？」

「は、筍でございます」

「ほう、もうそんな季節か。竹冠に旬と書いて筍という文字はできた。してその筍は到来物か」

「いえ、到来物ではございません」

「では八百屋で買い求めたものか」

「いえ、買い求めてもおりません」

「到来物でもなく、買い求めてもいないものがなぜ我が家にあるのじゃ」

「実はご隣家の筍がこちらの庭に出てきましたのを、掘り出したものでございます」

「何と！　古来『渇しても盗泉の水を飲まず』と言うではないか。何ということをいたすのじゃ」

一応咎め立てしたものの、実はこの武士、筍が大好物。

「隣家へ行ってこう言いなさい。『不埒にもご当家の筍が我が家の庭に忍び込みました。戦国の世ならば間者も同様、召し取って無礼千万と手討ちにいたします。そのお断りに参りました』と――。ワシは鰹節のダシを取って待っておる」

家来は隣家へ行って言われた通りの口上を述べる。

「相分かった。不届き至極な我が筍、いくら泰平な世とは言え、お手討ちにされるはやむなきこと。やむなきこととは言いながら、しかしせめて遺骸はこちらへ是非お下げ渡しを願いたい」

「あの、うちの旦那は鰹節のダシを取っているのですが」

「そうか、お下げ渡しはダシ諸ともでも一向に苦しゅうないぞ」

戻った家来はこう言われたと話す。

「ほう、遺骸を引き渡せとな。ダシ諸ともでも苦しゅうないときたか。なかなか言うではないか。敵もさるものじゃ。ではもう一度隣家へ行って参れ。で、こう言いなさい。『不埒な筍めはすでに当方にて手討ちにいたしました。遺骸は当方にて手厚く、腹のうちに葬り、骨は明朝、高野（厠）に納まることでございましょう。これはその筍の形見でございます』と言って、この筍の皮をバラまいてきなさい」

家来はまた隣家にやってくる。

「おお、遺骸とともに鰹のダシも持って参ったか？」

「いえ、違いますんで。これは筍の形見でございます。お受け取りください」

そう言うと、家来は筍の皮をバラバラバラバラーっとまいた。

「うーむ、間に合わなんだ。最早お手討ちになったか。おお可哀や、かわ（皮）いや（嫌）」

◆

これが『筍』という落語です。筍の出回る季節に合わせ、春によく演じられます。『長屋の花見』などの桜の噺がいくつかありますが、その少し後ぐらいの時期でしょうか。

上方落語で、人間国宝であった桂米朝師匠がこのネタをよくやっていました。それが広まり、今では東京の落語家も手がけます。都市の性格上、上方落語には武士はあまり登場しません。商人は大勢出てきますが。

武士はやはり江戸に似合います。ですからここでは舞台を上方から江戸に置き換えました。ただし、武士とは言えど、刀は抜きません。この『筍』では洒脱な会話の応酬が眼目です。何しろモノが庭から顔を出した筍ですから、大喧嘩になるはずもなく、何度も隣家との間を往復させられる家来こそ気の毒ですが、武士二人共に会話を明らかに楽しんでいます。

たわいのない落語らしいオチです。可哀や、かわ（皮）いや（嫌）ですから。このオチが噺の味わいを軽妙にしていると言えるでしょう。筍は煮ても焼いても美味いですよね。鮮度のいい刺し身もたまりません。

さてこの春、あなたはもう筍を食べましたか。